



ぶー・ふー・うーのメンバー

ぶー・ふー・うー

学生

地域貢献事業

第11回

「体験を通じて『食』や『農』に興味、関心を持ってもらいたい」と活動する「ぶー・ふー・うー」。学生地域貢献事業の各団体は、事業内容を毎年継続していくことが多いが、ぶー・ふー・うーは年ごとに新しい企画を立ち上げている。メンバー

が代われば、やりたいたいことや興味のあることも変わる。だからこそ大切にするのは「自分たちが楽しむ」ということだ。

2019年発足。

新型コロナウイルス感染症の影響で変更を余儀なくされた活動はあるものの、柔軟に対応することで無理なく活動を続けることができている。昨年度は廃棄されるはずだった夏ミカンでジャムを作り、食品ロス問題に向き合っ

た。大学構内の畑でサツマイモ作りも始めて、収穫した作物でクッキーを手作り。コンポストで堆肥作りにも挑戦した。

今年度は食育活動

に力を入れる。構内にある児童クラブに通う子どもたちと一緒にサツマイモの苗を植え、収穫した。座学を組み合わせることで、普段自宅で食べている食材が、生産者

からどのようにして食卓に並ぶのか、子どもたちに食糧の大切さを楽しみながら伝える。収穫したサツマイモは、他団体が主催するイベントでスイーツにして売った。

また、同世代に食

のありがたみを感じてもらおうと、考えているのはニワトリの食肉処理を見せる行事。団体設立のきっかけでもある田原

食や農に関心を

今年度は食育



食育ワークショップの様子

市の「渥美どろんこ村」と協力するこの行事は、「命をいただいている」という感覚が希薄になりがちな現代で、大学生に命の大切さを伝える「重要な機会になれば」と説明する。

9人のメンバー

は、全員が食農環境コースに通う学生。代表の3年、船津柊司さんは「普段農業に触れる機会がないので、農家がどうやって作物を育てているのか、活動を通じ

て実際に体験できるのは大きい。授業での学びがさらに深まりました」と話す。

船津さんは、個人

でも農業に関するさまざまな活動に取り組んでおり、東三河で盛んな農業を支えたという思いが強い。「今はスパーに行けば当たり前食材が買える。簡単に手に入るからこそ、その背景にある問題に学生として向き合いたい」と語る。(飯塚雪)

※協力・愛知大学